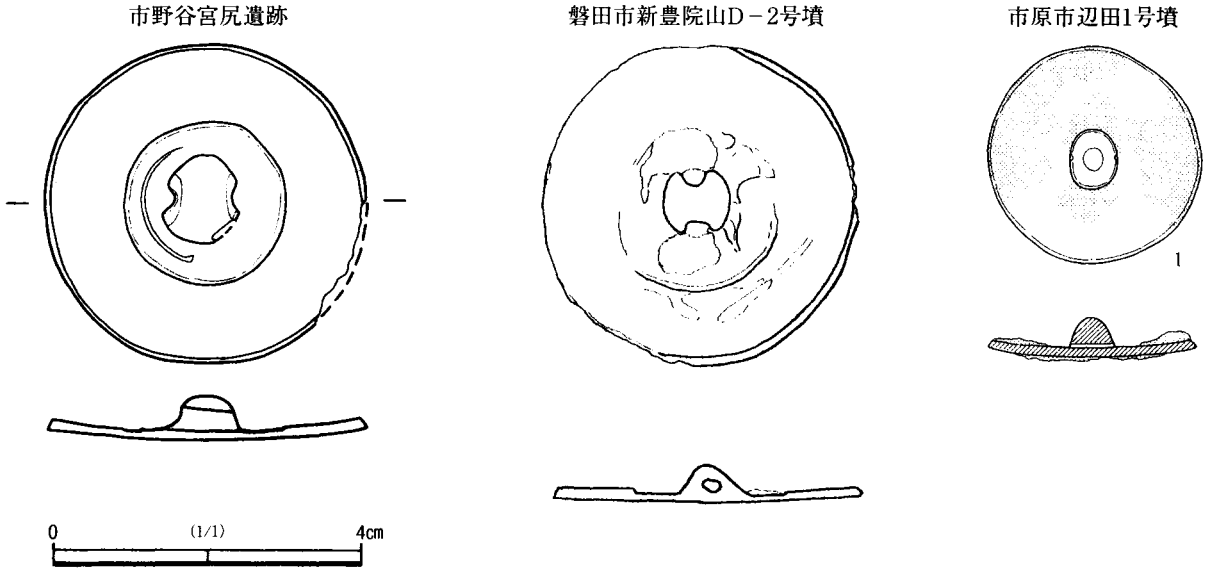
落で、市野谷宮尻遺跡から続く同一の集落と考えられる。宮尻遺跡でD群とした竪穴住居群に含まれる位置にある住居は古墳時代前期であり、空白地域を挟んでさらに東側に中期の集落が展開している。中期の集落からは、剣形品をはじめ多くの石製模造品が検出され、工房跡と思われる遺構も確認されている。中期の住居軒数は比較的多いが、後期以降の住居はまったくみられない。この3遺跡で台地上の集落の全体像を伺うことができ、江戸川側の台地西側から集落が形成され、徐々に東側に広がり、最終的には東側に拠点を移しその後台地上から姿を消すようになる。集落開始の契機は、市野谷宮尻遺跡で示したように他地域からの移植集団による新たな開発があったものと思われる。

第2節　竪穴住居跡出土の素文鏡

本遺跡で検出された遺物のなかで注目されるものに、SI－007竪穴住居跡から出土した小形仿製鏡があげられる。非常に良好な遺存状況で、ほぼ完形である。第13表にあるように、県内における素文鏡の出土遺跡は本遺跡を含めても6例と少なく、集落内出土に限ると4例確認される。美生遺跡群第6地点出土の素文鏡は、遺構に伴うものではないが、弥生時代から古墳時代にかけての集落は竪穴住居のみで構成されており、集落に伴うものと判断される。地域的にみると、これまでは市原市及び袖ヶ浦市という上総北西部、東京湾岸に限られていたが、下総からの出土ははじめてである。本遺跡とほかの遺跡の大きな違いはその

第13表　千葉県内出土素文鏡

遺　跡　名	出土遺構	遺構の時期	所　在　地	面径(cm)	備　　考
草刈六之台遺跡	823号住居	中期後半	市原市ちはら台南	2.95	
西谷古墳群	18号墳	終末期	市原市加茂字西谷	2.12	
辺田1号墳	中央施設	前期前半	市原市惣社字辺田	2.85	
草刈遺跡	L区37号住居	前期	市原市ちはら台西	2.4	鏡背に赤色顔料付着
美生遺跡群第6地点	遺構外	前期	袖ヶ浦市大字久保田字須田連	2.65	
西初石五丁目遺跡	SI－007住居	前期前半	流山市西初石五丁目	4.1	



第69図　各地の素文鏡

面径に表れている。本遺跡例は4cmを超すのに対し、ほかはすべて3cm以下となっている。これらはいずれも鏡背面が平坦で、本例のように内区と外区に段差を有するものではない。森岡氏は、「近畿系小形仿製鏡の二つの方向」のなかで、「布留式期に向けての退化・素文化・衰微の方向であり、やがては弥生期小形鏡の終熄へと至る。」[2] としている。3cm以下の素文鏡はまさにこの流れの終焉期に属するものと思われ、西初石五丁目遺跡のような例はその前段階に位置するのであろう。県外に類例を求めてみると、静岡県磐田市新豊院山D2号墳の主体部から三角縁吾作銘四神四獣鏡とともに素文鏡が1点出土している。法量は本遺跡例と同様で、やはり内区と外区の境に段があり、内区にわずかにもりあがった文様状表現の残存がみられるとされる。報文では、この鏡が出土した2号墳は、前期中葉に築造されたものと考えられており、西初石五丁目遺跡の鏡は、ほぼ同様の時期かやや新しくなるかもしれない。辺田1号墳の報告で、木對氏は、新豊院山D2号墳の素文鏡は、辺田1号墳より先行する可能性が高いとしている[3]。西初石五丁目遺跡例が新豊院山D2号墳の鏡ときわめて類似している状況から、辺田1号墳よりも先行する鏡と考えられる。辺田1号墳の築造時期は、4世紀第1四半期前半代、土器型式では布留Ⅰ式併行期、廻間Ⅲ式2段階から3段階に相当するものとしている。市野谷宮尻遺跡では、布留Ⅰ式併行期を宮尻Ⅲ期と想定しており、西初石五丁目遺跡出土の鏡は、宮尻Ⅱ期に対応するものと思われる。この時期については、先述した出土土器や集落の変遷と合致するものである。

この鏡については、出土竪穴住居の様相から廃棄状況を伺うことができる。覆土上層出土という状況からみると、本住居の廃絶時に遺存していたものではないと考えられる。さらに詳しくみると、床面や壁は火を受けておらず、覆土中層に焼土の堆積がみられる。この点からは、竪穴住居廃絶後の窪みを利用して焼土等の投棄が行われ、さらに鏡や手捏ね土器などを一括して廃棄したことが想定される。すなわち、祭祀行為に伴って使用された鏡や手捏ね土器の廃棄場所として捉えることができよう。

古墳時代前期の小形仿製鏡が集落に伴って出土する点については、これまでもいくつか研究がなされている。弥生時代の銅鐸や銅矛などを使った「地的宗儀」から、銅鏡を用いた古墳時代の「天的宗儀」へと変化していくことが論じられ、古墳時代的宗儀は、畿内から東海、関東へと広がっていったことも指摘されている[4]。

市野谷宮尻遺跡では、宮尻Ⅱ期の段階に屋内祭祀や屋外祭祀が行われていたことを想定したが、鏡を出土したSI－007の周辺にある竪穴住居跡からは、手捏ね土器やミニチュア土器が出土している。特にSI－005からは土製の勾玉が検出されており、鏡や勾玉を用いた祭祀が付近で行われていたことが想定される。また、市野谷宮尻遺跡を含む本集落は、宮尻Ⅰ期の段階に他地域からの移植集団によって開発された可能性が高いことを呈示した。その集団は、宮尻遺跡出土の墨書土器の検討から、伊勢湾周辺を拠点としていたと想定され、鏡を用いた祭祀が東海から関東へと広がっていくことと関連して注目される。

註1　比田井克人　2004「受け口状口縁甕の出自」『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣

2　森岡秀人　1989「銅鏡」『季刊考古学』第27号　雄山閣

3　木對和紀　2004「辺田1号墳の位置づけ」『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』市原市教育委員会

4　鈴木敏弘　2007「土鐸から土鏡の祭祀へ－集落の祭りと祭祀同盟」『原始・古代日本の祭祀』同成社